

子どもに優しい学校運営を



高橋 武昌

新潟市に転入したばかりの若い女教師は、家庭訪問第一日目の夜七時半ごろ、教頭より電話をもらいました。「先生、家庭訪問終わったんですか」「ハイ」「終わったらちゃんと学校に連絡もらわないと……」と普段の声より語気がちがいます。その先生は、学級の父母と子どもの話をきいて、学級経営にも何か光がさしてくるようで充実した一日だったと思っていたところでした。

一人ひとり個性のちがう子どもたち、その背景には親たちの苦勞に満ちた多様な日々に暮らしています。教師は、この多様性と日々むきあい大奮戦しているところなのです。子どものためにも、父母のためにも

臨機応変に時間・場所を問わず対応できるゆとりが教師に保障されなくては、ゆきとどいた教育をすすめることはできません。家庭訪問が終わったら終了の電話を必ず学校に入れるよう指導された前任校の例でしたが、職場で話し合い、学校長によくお話をしやめることにしてもらいました。

上意下達の点検が幅をきかず学校運営は、子どもの心を傷つけます。その前に、子どもにむかって励ましや勇気や正邪を教え共に考えていく教師は、たての命令や指示の中で悩み、揺れ、真理から目をくもらせてしまうことだって生まれるかもしれません。

三十数年前、新卒の私を午後四時を過ぎると宿直室

に呼び酒の相手をさせながらよく語ってくれた教師のことを思いだします。「職員会議では、必ず一回はちゃんと自分の意見は言うこと」「校長であろうとだれであろうと、相手に意見があるときは、勝手に妥協せず子どもの姿を思いうかべて語れ」「決して子どもと親をバカにするな」と。

現任校では、校長先生は、先生方の優れた取組を支え、全校の子ども、教職員に広げてくれています。学級だよりや学年だよりのいいところを、学校だより、校長室だよりにのせて広げてくれています。

今、学校には、大きな太鼓とそのバチさばきのいい打ち手が求められていますね。競争原理に走り、子ども達を駆り立てたり、「ナイフ殺傷事件」などなんでもあり……という学校がふえています。子どもたちに優しい学校、子ども達のよさがひびきあう学校が再生されねばなりません。意外と子どもの言い分を深くうけとめることが苦手だったり、型を教えこみまずキチンとさせるところから始める先生もいます。

このことは、管理し支配する管理職の方向を安易に受け入れてしまう状況をつくってしまいます。

逆に管理的な教師をたしなめ、子どもたちに寄り添

ってその成長を支えていく優れた教師を励ます管理職が求められています。

大人の「子ども像」を問い直そう

いま、「どういう子どもを育てるのか」という大人の子どもの像が問われています。子どもたちは「良い子」か「悪い子」かということばで簡単に区分けされてしまいがちになっています。それも「良い子」とは「はやくできる子」「まちがわずにできる子」「反抗せず素直にいうことをきく子」「成績の良い子」のことに
なりがちです。「心優しい子」「しなやかな感性をもっている子」「じっくりとからだを育てている子」などにはハイスピードの詰め込み教育についていけない、競争社会では落ちこぼれることになるゾといわんばかりの無言の重圧がつよまっています。

「落ちこぼれにしたくない」という気持ちが子ども
の内面をみることを抜きにした「叱咤激励」になって
いて、子どものためによかれと思ってやっていること
が、裏目にでていることに気がつかず親と教師が子ど
もに重圧をかけていることもあります。

相手の言い分をよく聞くことと、自分のおかれてい

る立場を客観的にとらえられるかどうかが鍵です。

どんな「すぐれた頭のいい人」でも自分自らの正しい判断力ができていないととんでもないことになることを、バブルがはじけて凋落した巨大証券・銀行・ゼネコンのエリートたち、きびしい世論にたたかれて権力の座からすべりおりた高級官僚がおこした一連の事件で、いやというほど見せつけられました。

自分のやっていることを冷静に分析できる認識能力が問われている時代です。

教育を大きな枠組みの中で考えたい

自分の置かれている立場を客観的にとらえることに関連して思うことがあります。

学校では今日の教育状況を大局的に考察するというデスクッションがなかなかできません。当面の緊急的出来事に追われたり、授業や行事を年間のスケジュールにあわせてこなすことで精一杯の状況です。自分たちの日々の教育実践が教育の大状況のよき部分を発展させることに寄与し、悪しき部分のはびこるのを押さえるものになっているかとても気になるところです。

私たちは（子供との触れ合いの時間確保のために）

「学校のスリム化の推進」につとめています（新潟県教育月報平成九年五月号特集）。

しかし、これが政府・財界でつくった「財政構造改革」の公教育のスリム化の話になりますと、教科書無償、義務教育費国庫負担制度、私学助成制度の見直し（削減・廃止）等々の話にまでひろがり、はては公費削減が公教育の衰退をもたらします。親達の公教育不信をよびおこし、お金のある親達の中にはお金をかけても学校の仕事、社会教育の仕事を民間委託したほうがよいのではという世論が人為的につくられ、教育を民営化させる結果になりかねません。

今日、学校運営をゆがめる「教育の競争的性格」を是正すること、また責任は部下に、成果は自分にとする教育行政や管理職の官僚的な指導をやめることは学校の大きな課題です。私たちの学校での小さな取組みを考えてみましょう。指導要領がかわらなくては、学級定数がかわらなくてはとばかり言っても、子どもにとっての学校は実現しません。双方をいっしょに統一して考えてみるべきでしょう。

(1) 学校の各部屋に鍵をかけない自由な出入りを

新潟市が特徴ある学校を、ということので二つの教室

をつなげて木の香りの漂う部屋をつくってくれました。ずっと鍵をかけておいたのですが、鍵をはずし、子どもたちが本をよんだり、休息したり、話をしたり、遊んだりする場所としてとても好適な居場所のひとつになりました。各準備室や危険を伴う所は、当然鍵も必要ですが、いま鍵の多い学校が目立ちます。

(2) 始業時間と休み時間の工夫

八時三〇分始まりで、朝からカリカリした時間をつくりません。普通は、八時二〇分始業で、一〇分位「朝学習」という例が多いのですが、八時三〇分には、先生方も教室に入り、一〇分程度の朝の会の時間をとって授業開始です。朝の一〇分は大変効果的です。勿論、午前の長い休み時間、昼休みも長くとるようにしています。先生方の中には、すこしでも早く始めてドリルでもやらせ力をつけたいという意見もないことはありません。逆に無理に学校に長い時間、おしとどめておくことはやめようという意見もあります。そういう中の合意のひとつです。

(3) 校長先生を始め子ども前にたつ先生方のお話の工夫

全校訓話の長い校長先生の話は駄目ですね。わたし

たちの学校の校長先生は、要を得て短く、時には自分の歌、ハーモニカとなかなか、子どもにより寄っています。全校の前にたつ先生方の工夫もなかなかなのです。楽しさとユーモアと勘どころをつかんだ耳と目と体に訴える話は好評です。

(4) 子どもたちの心の自由、文化を享受する行事を大切に

P T Aに支えられての取組です。「いきいきスクールのステップアップの企画にそってパントマイムの公演、混成合唱団の演奏などをやりました。こんどは横浜にある大道芸、空中芸の芸術集団をまねいての企画をたてています。

冬のスキー合宿も好評です。先生方も心から楽しみます。教え込むことばかりに走る気持ちにふと気づくひとときでもあります。子どもたちの心を耕すことが吹っ飛んでしまいそうな過密ダイヤのカリキュラムを背負われている自分に気づくひとときでもあります。

昨年、秋、県弁護士会から依頼をうけてこの小学校の子どもたちが弁護士さんたち、障害をもつひとたちと「耳をすまして」（岡修造の戯曲）という演劇に出演しました。障害をもつひとたちの権利を大切にとい

う憲法発布五〇周年記念の弁護士会の企画でした。親たちが一〇〇名をこえて観劇し、感動しました。PTAが動き年の暮れもせまった十二月、この劇が学校で再演され、こどもたちにも親にも好評でした。

心をたがやす営みを親と共同でもっとすすめていきたいものです。

学校の大リストラの嵐が

子どもに優しい学校は先生方をリストラ、民営化してはつくれません。（『国家改造と自治体リストラへ自治体研究社』より）現実には公教育費削減で浮いたお金を大企業中心の経済活動にまわすところにことは動くのですが…。

長岡市の学校給食の自校給食から民間委託への話や「人材教育」のうごきはその方向へのひとつのあらわれかもしれません。

学校のスリム化は大状況のところでは全体をスリム化（支出削減）をしながら中高一貫教育など「教育上の例外措置」（一九九七年六月の中教審第二次答申）で一部のエリート候補だけに日を当てる「効率的」な差別教育がすすむというのが現実にはじまっています。

子どもたちは「できなくされている」教育のなかで自分の努力がたらずにそうだったと思ってしまい、じぶんの価値を否定なしに「点数」できめていく意識になるにはなんともやりきれません。

教師や親が手を組み、地域の人たち、教育行政の方たちにも支えられて「そうになっているのは君達のせいでない。大人達で力の限り守っていく」と共同していきける日々の努力をつくっていききたいものです。

農協で働く友人が「日本の農業の不振の中で、必死に考えた。せまるリストラの嵐にたちむかうには、すべてのひとたち、農民、消費者、学校給食にかかわる子どもたちの親、給食婦・栄養士等さまざまなひとたちとこの国の農業自給率をまもり、安全な食生活を築こうという運動の中でしか生き抜けないとわかった」と語りました。

「リストラの嵐にまだ遭遇していない公教育の世界は『教育荒廃』を自分のところだけで防ごうという甘さがある」とも指摘されました。社会道徳の荒廃・政治の腐敗もふくめて子どもたちは大人社会の被害者になっています。心あるすべての階層の人々が共同する時です。

（たかはしけまさ・新潟市江南小学校）